

「知ったかぶり」をやめて「志高ぶる」 ～地元学の実践～

群馬県太田市 相場毅正

「地元学」、初めて聞いたその言葉、正直「ふざけた名前だな」と思った。一体なんの学びにつながるのか。小学生の社会科見学じゃあるまいし。半信半疑から私の地元学はスタートした。

「いいからやれ」

優等生を気取りたい私としては、よくわからんが、とりあえず、事前課題に向き合ってみた。最初に手をつけたのが「環境クイズ」。私は知識の豊富さを褒められることがよくある。自分でも知識はあるほうだと思っていた。「自分ちの飲み水はどっからどう来ているのか」「どこにどう排水されているのか」「年間の雨量は」・・・あれれ、おかしい、ほとんど答えられない・・・自分の足元の、こんな基礎的な情報さえもまともに答えられない。「これはやばいぞ」私の過剰な自信（知ったかぶり）が音を立てて崩れ去っていった瞬間だった。

次に「地元の人へのアンケート」。できれば50人、常に上限を狙うのが私のアスリートとしての性。しかし、なかなか、インタビューを聴きにいける相手が思い浮かばない。毎日朝礼で「市民の目線で考えます！」と唱和しているくせに、私は実際に市民と対話をして声を聞くことをしてこなかったんだと、思い知らされた。そしてインタビューでの答えは、私の先入観からかけ離れた回答も多く「ああ地域の人こんなこと思っていたのか」という新鮮な発見を得ることができた。

さらに「一代記」。老人会長へのインタビューと、そして、思いきって自分の74歳の母にインタビューを試みた。衝撃だった。普段一番身近な親とさえそんな会話をしたことがなかった。一代記を通じて、母親が74年の歳月を重ねる間、どのような想いで、地域で暮らしてきたのか。元々デザイナーだった母親にとっては東京で暮らしたほうが合っていたんじゃないかと思っただけで、ここ地元で体現した価値、実感した「豊かさ」とは何だったのかに触れることができ、不覚にも親の話で涙がこぼれた。

そしてむかえた東京での講義。半信半疑から入った地元学、講師の吉本氏を実際に見て正直な感想「ほんとに大丈夫かな・・・」キリッとした講師ならまだ説得力が出るものの、私がいつも溪流釣りの時にすれ違うベストを着たおっさんにそっくりだった。明らかに虎ノ門では浮いている..。

しかし、吉本ワールドにはまっぴり行くのに時間はかからなかった。「**見ているつもりで、(本質が)見えていないのではないか・・・**」。さらには「下ごころを持て」「冗談を言え」「面白くなかったら誰もやらん」「遊ぶ予定を先に決めておけ」・・・私の心中にMAXで内在しているが押し殺してきた価値観に対して「やりなさい」と。私は心の中で何度ガッツポーズをしたことか。だんだんこのおっさん、いや、吉本先生のお話しを聴くことが面白くなってきて、どんどん引き込まれていった。

講義を聴いた後、地元に戻っての地元学の実践。みんなの華々しい地元調査の様子がフェイスブックに上がってくる。やばい。俺は進んでいない。俺もかっこつきたい。いや、でも表面的にやってしまったらいつも通りの薄っぺらい俺になってしまう。ここはもう愚直に、私の場合は逆にハードルを下げて地元学⇒足元学へ。自分ちや、その周りのことを集中的に調べてみた。

自分ち築150年ほどを数える古い家だ。最近でこそ「古民家」なんていう言葉が流行り出したが、私にとってはコンプレックスでしかなかった。虫なんて出ない日はなかったし、ボットン便所が恥ずかしくて彼女も家に呼びたくなかった。しかし宿題である以上、自分の家と向き合ってみた。普段は興味なかったのであまり話したこともなかった、地元の知識自慢のおっさんのところへ行って、一緒に郷土史を紐説いた。なんと、戦国の時代に、地域にあった矢場城の一部として、しかも一城別郭で自分ちが存在していたという・・・今の住宅地図と当時の城の区画が一致しているのを目の当たりにした時は鳥肌が止まらなかった。また、自分ちの敷地内には湧水があって、それは幼い時は友達の家にもあったので当たり前のことだと思っていたが、調べてみたら、今は自分ちにしか残っていないことを知った。歴史・文化なんていう綺麗な言葉を並べるつもりはないが、自分の足元の豊かさを知るには余りある体験となった。

水俣での発表本番では、1人5分と決まっていた。しかし、受講生は余計な前提等をグダグダと話し出してしまい「**何が言いたいのかさっぱりわからん！結論から言え！**」と激が飛んだ。さすがに適当(柔軟)なだけの先生ではない。突くところはキチッと突いてくれる。

こうして行程が終了した。自分が失っていた視点や人間味を、どんどん取り戻せていけている気がする。この調子で実際の行動に結びつける。見ていてください吉本先生、横尾先生。吉本先生が適当になりかけたときに軌道修正をしてくれた横尾先生がキーパーソンであった。

東京財団のチューターに怒られそうになったら「だって、吉本先生が下ごころを出せ、遊ぶ予定を入れろ、と言っていましたよ」と、免罪符のように「吉本地元学」を利用しようと思う。これからも私の地元学は続く。独りじゃなくて、地域の仲間と共に。